子どもが「できた」を実感できる体育科の授業づくり
～跳び箱運動の実践を通して～

熊本市立出水南小学校　教諭　伊東大輔

要約

学習指導要領の改訂に伴い，跳び箱運動の「首はね跳び」は小学校中学年の技として例示されている。跳び箱の上で跳ねるという難しい技の特性上，子どもは難しいと敬遠し，「できた」という器械運動の喜びや，楽しさを実感しにくい技でもある。

本実践を通して，学習課題の設定の工夫と評価の方法を工夫し，子どもたち自らが学び合う学習スタイルを作り上げていくことで，一人一人が跳び箱運動での「できた」を味わえるということが明らかになった。

＜キーワード＞　学習課題　単元計画　場の工夫　共通言語

１　授業の概要

本単元では，「首はね跳びに挑戦し，できるようになった姿を家族に紹介しよう」というゴールを子どもたちと共に設定し，一人一人が明確な目標をもち運動に取り組めるようにした。家族に伝えるという課題を設定したことで，跳び箱運動が苦手な子どもであっても頑張っている自分の姿を安心して見せることができると考えた。

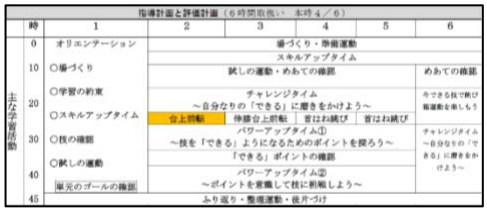
さらに，単元計画の工夫や子どもの実態に応じた場の工夫をすることで一人一人の「できる」を保証したいと考えた。授業の中で，首はね跳びができるようになるためのポイントも教えるのではなく，子どもたちと共通言語として作り上げていき，その共通言語をもとに，教え合いながら運動していくことで，「わかった」「できた」を実感できるよう取り組んだ。

２　授業の取り組み

首はね跳びを「できる」ようになるためには，徐々に首はね跳びを行うためのポイントが身に付いていくように回転系の系統に合わせた計画に変更した。（図１）

また，場づくりの工夫では，高さや広さを工夫した易しい場を多く設定し運動が苦手な子どもでも運動に取り組める環境を第一に考え場づくりを行った。（図２）

単元終末には，家族に自分の成長を伝えるためのポスターを作成したことで，自分のわかったことやできるようになった姿を実感することが出来た（図３）



【図１　系統を踏まえた単元計画】

【図２　安心して運動できる場の工夫】

３　実践動画での主張点

今回，教師が技のポイントを与えるのではなく，子どもたち自らが技を試し，発見していく過程を重要視した。子どもたちが動きを言語化し，共有することで，互いの技を見合う基準となる共通言語が生まれていった。共通言語をもとに技に挑戦することで「わかって」「できた」を実感することができた。

【図３　単元終末のまとめポスター】